

2020年7月12日（日）「結婚における本来的男女関係の表現」

雅歌 4:1-16

若者

- 1 なんと美しい、私の恋人よ。なんと美しい。ベールの奥の目は鳩のよう。
あなたの髪は、ギルアドの山を駆け下りる山羊の群れのよう。
 - 2 あなたの歯は、洗い場から上って来る毛を刈られる羊の群れのよう。
それらは皆、双子を産み、子を産めないものはありません。
 - 3 あなたの唇は紅の糸のよう、話す口元は愛らしい。
ベールの奥の頬は、はじけたざくろのよう。
 - 4 あなたの首は、武器庫として建てられたダビデの塔のよう。
千の盾がそこに掛けられている。それらは皆、勇士たちの小盾。
 - 5 あなたの二つの乳房は二匹の小鹿のよう。
百合の間で草を食んでいる双子のガゼル。
 - 6 日が息をつき、影が逃げ去るまでに、没薬の山、乳香の丘に私は行きましょう。
 - 7 私の恋人よ、あなたのすべては美しく、あなたには何の傷もない。
 - 8 花嫁よ、レバノンから私と一緒に、レバノンから私と一緒に来なさい。
アマナの頂、セニルとヘルモンの頂から、獅子の隠れ家、豹の山から下りなさい。
 - 9 私の妹、花嫁よ、あなたは私の心をときめかせる。
あなたの一瞬のまなざしも、首飾りの玉の一つも私の心をときめかせる。
 - 10 私の妹、花嫁よ。あなたの愛はなんと美しいことか。
あなたの愛はぶどう酒よりも心地よく、あなたの香油は、どのような香料よりもかぐわしい。
 - 11 花嫁よ、あなたの唇は蜂蜜を滴らせ、舌の裏には蜜とミルクがある。
あなたの衣はレバノンの香りのよう。
 - 12 私の妹、花嫁は閉じられた園。閉じられた池、封じられた泉。
 - 13 あなたは、見事な実をつけるざくろの果樹園、ヘンナやナルド。
 - 14 ナルドやサフラン、菖蒲やシナモン、あらゆる乳香の木々。
没薬や沈香、あらゆるえりすぐりの香料。
 - 15 園の泉、命の水の井戸、レバノンから流れ出る川。
- おとめ
- 16 北風よ、目覚めなさい。南風よ、吹きなさい。私の園を吹き抜けて、その香りを振りまいてください。
愛する人が自分の園に来て、見事な実を食べますように。

【序論】

今日はこの礼拝の中でO兄とI姉の婚約式を執り行ないます。O兄、I姉、ご親族の皆様、おめでとうございます。新型コロナウイルスの影響により、元々5月3日に予定していた式の日程を今日にずらさざるを得なくなりましたが、このように実施できることを主に感謝しています。もう11年以上前になりますが、私たち夫婦も香川県の妻の母教会で婚約式をしていただき、それから2ヶ月以内にこの礼拝堂で結婚式を挙げました。私たちの場合、二人の間に物理的な距離がありましたから、婚約式は妻側の関係者にとっては結婚式のような扱いとなりました。とはいえ、婚約式はやはり結婚式とは別物であり、二人は最終的な結びつきには至っていない状態での「約束関係」に入ることになります。それなら結婚式だけ行なえばよいではないかと言われるかもしれませんが、私はこの「約束の期間」というのは非常に大切な時だと思っております。この期間にはまだ二人は生活を共にしておりませんので、肉体的な結びつきのない、言わば「心における信頼関係」を深く構築する時なのです。ただの「お付き合い」ではなく、心においては夫婦として、物理的には制限された繋がりの中でお互いを知り合うことを学ぶ、(結婚してからではもう経験できない) 貴重な時間であります。自分のことをあれこれお話しして恐縮ではありますが、私たちは婚約期間中、(レトロな方法でしたが) 毎週手紙を書き合い、結婚式の準備に追われる中にあっても、リラックスした会話を楽しむように努めたのを覚えています。この数ヶ月は結婚に向けての精神的基礎づくりとなりました。そして、このようにして築き上げられた精神的一致が実際の形となるのが結婚というものではないか。その意味で、私は「霊的婚約期間」と呼んでおります。

【本論】

本論1. 雅歌とはどういう書なのか

今日は婚約されるお二人への^{はなむけ} 餞となる聖書箇所を考えておりましたが、旧約聖書の『雅歌』を選ばせていただきました。聖書朗読をお聞きになって分かりますように、ここには少々刺激的とも言える赤裸々な愛の表現が散りばめられています。読んでいる私も背中がくすぐったくなるような感覚でした。

まずは、この『雅歌』という書について、少し説明させていただきます。これは8章までしかない短い書なのですが、紛れもない「恋愛詩」であり、男女の愛を称え祝う内容です。特徴としまして、聖書には通常ほとんどの書にも「神」が登場するのですが、

何と雅歌には「神」という言葉が一度も出てこないのです（その他、「神」の御名が一度も出てこない書は『エステル記』のみ）。つまり、この書では人間的な愛の尊厳と純粹さが徹底して歌い上げられていると言えるでしょう。しかし、その前提には「神」の存在があり、人間を二つの性にお造りになった神の御旨が、男女が惹かれ合い、結ばれ合うことによって表現されているのです。

雅歌は実際、読み方が簡単ではなく、初めて通読された方は、「一体この部分は誰の言葉なのだろう」と煙に巻かれたような感覚になるかもしれません。ただ、今日用いさせていただいた「聖書協会共同訳」という新しい日本語訳聖書には、誰の言葉であるかが分かるように各部分に語り手の名称が付けられています。そこに出てくる登場人物は「おとめ」「おとめたち」「若者」の三者で、基本的には「おとめ」と「若者」が交わす愛の会話であり、所々に「おとめたち」が合いの手を入れるように言葉を挟んできます¹。「おとめ」は、南ガリラヤの小さな農村であるシュラム出身の田舎娘が想定され、「若者」は彼女が愛する羊飼いで、この二人の恋物語であると考えられます²。

ところで、聖書の中にこのような書が置かれていることに読者は驚かされるのでしょうか。読む方もあれこれ想像しながら読むわけであり、いえ、むしろこのような「詩文」は想像力たくましく読まなくては十分な理解が得られないのも事実です。こういう書であるので、雅歌の正典性に疑問を持つ人も多く現れ、性的な要素を避けるために、寓話化、類型化、劇化しようとする向きもありました。しかしながら、そのような読み方は、人間の「性」を「悪」と捉える人間の傾向から出ているものであり（実際、性は罪の道具となりやすい）、もし「性」というものが本来「聖いもの」として創造されたのであれば、この書はすべてを良いものとしてお造りになった神の創造の御業へと戻っていくものであると言えます。確かに聖書は結婚外のあらゆる性的関係を罪と呼んでいます。結婚した夫婦間の性的関係はむしろ祝福として描かれていることが分かる。男女の心の一致が、肉体的一致によって最終的に表されるのです。創造のはじめ、人類最初の男であるアダムは、連れて来られたエバを見て、「**これこそ、私の骨の骨、肉の肉。これを女と名付けよう。これは男から取られたからである**」（創世記 2:23）と歓喜の叫び声を上げました。雅歌はこの本来的、全き純粋な男女関係を描き、読者をそのところへ引き戻そうとしている書なのです。

本論 2. 雅歌 4 章における官能的表現

¹ 雅歌の解釈は様々で、「比喩的解釈」「劇詩的解釈」「祭儀的解釈」「詩歌的解釈」「予型論的解釈」「純愛的解釈」などがある。ここでは「純愛的解釈」の立場に立つ。

² 表題（1:1「ソロモンによる」）から、「若者」をソロモンと捉える向きもあるが、原文の「リシュロモ」は「ソロモンに関する」「ソロモンに属する」「ソロモンに献呈された」などの意味でも捉えることができるので、必ずしも「若者」をソロモンとする必要はない。

このような視点をもって、雅歌4章を読んでみますと、1節から15節まで延々と続く「若者」の褒め言葉は、いやらしさではなく、純粋な恋心と愛情の響きとなって聞こえてきませんか。この箇所のような詩的表現を解説してまいります。

1節では「**ベールの奥の目は鳩のよう**」と言われます。「君の目は鳩のようだね」と言われて嬉しいかどうか分かりませんが、笑った目が鳩の形に似ているとか、かわいらしい鳩の目に似ているとか、そんな意味なのでしょう。「**あなたの髪は、ギルアドの山を駆け下りる山羊の群れのよう**」とは、パレスチナのほとんどの山羊の毛が長く黒いため、その長い髪の毛の流れは、山羊の群が山を駆け下りて来るように美しいということが言いたいのでしょう。

2節では「**あなたの歯は、洗い場から上って来る、毛を刈られる羊の群れのよう**」と言われますが、これはおとめの歯が洗われたばかりの雌羊のように白く、歯並びが良いことの表現です。そして、「**それらは皆、双子を産み、子を産めないものはありません**」とは、おとめの歯が左右対称で欠けがないということを言っているようです。

3節の「**ベールの奥の頬は、はじけたざくろのよう**」という表現は、言われる方は果たして嬉しいのでしょうか。言わんとすることは、ざくろの赤い色のようにほっぺがピンクに染まっているということだと思われます。

4節の「**あなたの首は、武器庫として建てられたダビデの塔のよう。千の盾がそこに掛けられている**」とは、おそらく美を象徴する塔があり、首がそのように美しいことを言おうとしているのでしょう。「盾」とはネックレスのことで、幾つも首に掛かっていると。

5節の「**あなたの二つの乳房は二匹の小鹿のよう**」とは、おとめの美しい体を褒めているのであり、6節の「**没薬の山、乳香の丘に私は行きましょう**」とは、結ばれ合う日を夢見る思いを表しています。

8節では「**レバノン、アマナ、セニル、ヘルモン**」という山々の名称が出てきますが、これはレバノンの山地は険しく、特にヘルモン山は標高2700mもありましたから、おとめは美しすぎてとても近寄り難いということを言わんとしているのでしょう。

10節に「**私の妹**」という表現が出てきますが、これは愛しい女性に対する愛の表現であり、必ずしも血の繋がりを言い表すものではありません。

11節あたりになると、「**あなたの唇は蜂蜜を滴らせ、舌の裏には蜜とミルクがある**」などと、美しい唇を称える表現が出てくるようになります。

12節の「**閉じられた園**」「**閉じられた池**」「**封じられた泉**」というのは、おとめが若者のために貞操を守り、他の何者をも近づかせないことを言い表しています。

13節、14節に次々と登場する「**ヘンナやナルド**」「**ナルドやサフラン**」「**菖蒲やシナモン**」

「あらゆる乳香の木々」「没薬や沈香」といった植物は、外国から輸入された香料で、美と官能のシンボルだと言われます。

そして、15 節では「園の泉、命の水の井戸、レバノンから流れ出る川」と言われ、12 節の「封じられた泉」「閉じられた庭」が開かれ、二人がついに結ばれ合うことを表しています。

16 節ではおとめが「愛する人が自分の園に来て、見事な実を食べますように」と、若者の愛の求めに応えています。

実は、その結論として 5:1 があり、若者の言葉で雅歌全体のクライマックスを迎えます。

私の妹、花嫁よ。自分の園に私は来ました。私は私の没薬と香料を集め蜜の滴る私の蜂の巣を食べ、私のぶどう酒とミルクを飲みました。

本論 3. 墮落によって歪んだ性の見方

以上、駆け足ではありましたが、雅歌 4 章全体の詩的表現を見てまいりました。私はこの説教を準備しながら、自分は婚約式当日、どんな思いでこれを語ることになるのかな…と少々不安でした。講壇から男女の性について語ることに恥ずかしさを覚えてしまうのではないかと。しかし、実はそこにこそ人間の歪んだ「性の見方」があるのだということに気づかされたのです。男女の性というものは、元々何の恥じらいもなく表現することができたものであったはずなのです。しかし、人間はそれをどこか「恥」「いやらしいもの」と思ってしまふ。そこには「自分のすべてがさらけ出される」という、人間の根源的な問題、自分のすべてを人に知られることへの恐れが表れているのでしょう。人はなぜ自分のすべてを見られることを「恥」と思うのか。それは、自らの内に「見られたくない部分」があるからではないか。天地創造の記事における男女の関係において、そのことが象徴的に表されていました。先に引用したアダムとエバの歓喜の叫びの後、創世記の著者は意味深長なフレーズを書き加えています。

人とその妻は二人とも裸であったが、互いに恥ずかしいとは思わなかった。(創世記 2:25)
これは、アダムとエバが罪を犯す前の状態であり、二人は服も着ていませんでしたが、互いに恥じらうことが何一つなかったというのです。人間はなぜ裸を恥じるのでしょうか。他の動物は何も身につけていないけれども、恥じるということはまったくありません。ただ人間だけが「恥」という感覚を持つのです。知性ゆえなのか。いえ、与えられた知性の使い方を間違っただけであると聖書は語る。創世記 3 章に入ると、アダムとエバが神との約束を破り、禁断の木の実を食べるという記事が出てきます。樂園において、

全き平和と幸せの中で生きていた二人は、この罪を犯した瞬間から互いを恥じるようになるのです。そのことを象徴的に言い表している記事があります。

- ・ すると二人の目が開かれ、自分たちが裸であることを知った。彼らはいちじくの葉をつづり合わせ、腰に巻くものを作った。(創世記 3:7)
- ・ 彼は答えた。「私はあなたの足音を園で耳にしました。私は裸なので、怖くなり、身を隠したのです。」(3:10)
- ・ 神は言われた。「裸であることを誰があなたに告げたのか。取って食べてはいけないと命じておいた木から食べたのか。」(3:11)

このように、聖書は人間が抱くすべての「恥」の原因を「罪」に帰しています。誰一人として健全な自己表現が他者に対してできない存在として生まれてくる。人間が服を着て生きているところには、その紛れもない事実があるでしょう。しかし、聖書の中心主題は「罪の赦し」であり、神と人との本来的関係の回復と、人と人との本来的関係の回復を教えています。そして、夫婦における愛の交流によって、この地上における人と人の心の一致が最高度に表されるのです。もはや何一つ隠すことのない心の一致がそこに回復されていく。それが、結婚のすばらしさであります。

【結論】

婚約式において雅歌から語るのは、時期尚早に思われるかもしれませんが、しかし、聖書的結婚観の究極の姿がここにあるのであれば、それを学び、結婚を待望しながらこれからの数ヶ月を過ごしていただきたいと思い、この箇所から語る決心をいたしました。結婚はすばらしいものです。その結婚がすべての人に喜ばれるものとなるように、お二人がこれからの数ヶ月、固く純潔を守り、婚約期間中にしか持つことのできない特別な心の交流を味わっていただきたいと願います。その霊的・精神的土台は、必ずや結婚後のお二人の一生を力強く支えるものとなることでしょう。

【祈り】

人間を二つの性として創造し給うた、天の父なる神様。人は互いに愛し合う存在として造られました。しかし、生まれつき性を恥じる傾向を持ち、そのところに自らの罪の問題を見出します。主イエスの贖いは、私たちの存在そのものを聖め、結婚において男女を真の自己として完成に至らせます。今日婚約されるお二人が、結婚に向けての第一歩を踏み出し、霊的・精神的一致の喜びを豊かに経験することができるようお導きください。誘惑や妨げから守られ、神とすべての人に喜ばれる結婚に至ることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人間を男と女とに創造し、互いに愛し合うべきものとなし給うた、父なる神の愛、
人間存在そのものを罪より聖め、真の自己を取り戻させ給う、主イエス・キリストの恵み、
婚約者のみならず、主にある聖徒一人ひとりを、霊的・人格的に他者を愛し思いやる関係へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、とりわけ今日婚約された O 兄と I 姉の上に、そのご家族の上に、限りなくあらんことを。